

## インタビュー 医科歯科連携のクリニックが開院

認知症専門クリニックにおける  
医科歯科連携の実践

近年、歯科疾患（歯周病）が糖尿病、心疾患、脳血管疾患などの全身疾患と関連することを示す報告が相次ぎ、認知症との関連も報告されている。神奈川歯科大学は、医療系大学初の試みとなる、医科歯科連携の認知症専門クリニックを開院した。認知症診療における医科歯科連携について、同学理事長の鹿島勇氏に伺った。（編集部）

認知症は予防・治療はもちろん  
罹患後の対応も重要

——「歯科・健脳クリニック日本橋」の概要からお伺いします。

鹿島 2020年に医療の国際化や医療インバウンドを見据えた取り組みとして、本学が運営する「羽田空港第3ターミナル歯科」を開院したことから始まります。口を動かすという行為は脳の働きに影響を与えます。口腔ケアの社会的役割が高まる中、わが国の歯科医療を求める訪日外国人を見込んでのことでもありました。そして、次の段階としてここでの成果を踏まえ、本学でも実践している医科歯科連携を取り入れたクリニックの開設に取り組むことにしました。

わが国は人生100年時代を迎えましたが、海外に目を向けても高齢社

会が大きな問題となっています。私はもともと骨粗鬆症と画像工学を専門としていまして、American-board（米国顎顔面放射線専門医）を取得し、骨粗鬆症の診断ソフトの開発などに力を入れていました。そのため、当初は骨粗鬆症のクリニックも考えていたのですが、2025年問題もあり認知症に目を向けることにしました。

世界に先駆けて超高齢社会に突入したわが国では、2025年には日本の総人口の30%が65歳以上となり、社会保障費の増大が社会的な問題として挙げられているのはご存じの通りだと思います。年金・医療・介護等の社会保障費がひっ迫する中で、65歳以上の5人に1人が認知症に罹患するとされており、認知症有病者の増加は後期高齢者の増加とほぼ同じとみていいでしょう。このような社会情勢になると、純粋なアルツ



学校法人 神奈川歯科大学

理事長 鹿島 勇氏

かしま・いさむ

1979年、神奈川歯科大学大学院卒業。1980年、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に留学。専門は放射線学。1982年、American-board（米国顎顔面放射線専門医）を取得。1990年、神奈川歯科大学放射線学講座教授。2009年、学校法人神奈川歯科大学理事長。現在に至る。

ハイマー病や認知症の治療というよりも、“健脳である”、“健脳でいられること”に注力すべきです。「歯科・健脳クリニック日本橋」は、脳と口腔の健康増進を理念に掲げ、医科歯科連携の脳機能・口腔疾患医療クリニックとして開院することにしました（写真1）。

——認知症における医科歯科連携を実践しているクリニックは前例がありません。

鹿島 本学の附属病院では、認知症・高齢者総合内科（もの忘れ外来）を

写真1 歯科・健脳クリニック日本橋



※画像はイメージです。

開設しています。そこでは日本認知症学会専門医と連携して、認知症の原因疾患の診断および治療の他に、臨床心理士による介護相談、カウンセリングを行っており、認知症における医科歯科連携のノウハウが蓄積されています。

昨今、歯科疾患（歯周病）と糖尿病などの全身疾患や認知症が密接な関係にあることが明らかになっています。歯周病が糖尿病の合併症であるとの認識も強まり、双方向で関連性があるとのエビデンスもあります。歯周病は細菌感染による慢性の炎症であるため、この炎症反応が認知症の病態に作用する可能性が示唆されています。

歯周病は40歳以上の約7割の人で歯肉に所見を有しているとのデータもありますので、認知症リスクのある人を早い段階から見だし、予防に結びつけるということの重要性が増しています。

——日本橋三越本店に開院されるといことも話題となりましたが、場所もこだわったのでしょうか？

鹿島 日本橋三越本店（経営：三越伊勢丹）に決まるまでは二転三転し、都内の他の場所で開院寸前までいった時期もありましたが、「なぜ認知症に特化したクリニックを開設するのか」という初心に立ち返り、あくまで場所にこだわりました。なぜ銀座・日本橋エリアなのかというと、医療インバウンド需要と、そこへ訪れる客層ならびに働いている人を考えてのことです。銀座・日本橋エリアは人種・年齢・性別問わず多くの方が訪れる場所です。認知症は高齢者に多い疾患ですが、若年性認知症もありますし、40代からの認知症リスクを軽減する取り組みが求められています。認知症の原因疾患の中で最も多いアルツハイマー病は、アミロイドβやタウタンパクなどの蓄積によって引き起こされると考えら

れています。長年にわたりそれらが蓄積され水面下で認知症が進行していくこととなりますので、遅くとも40代からアルツハイマー病の最初期段階や軽度認知症（MCI）を見つけていくことが大事になります。

また、土地だけでなく、日本橋三越本店で開院できたのは大きなメリットでした。そもそも三越伊勢丹も認知症に特化したクリニックの開設に意義を感じていたことも大きく、話は一気に進みました（写真2）。認知症による買い物トラブル対策もそうですが、顧客への付加価値という意味でもメリットがあります。消費動向は世界的にも「モノからコトへ」に変化を遂げていて、ユーザーも商品やサービスだけでなく、体験や時間に価値を求めています。われわれは単なる医療テナントではなく、日本橋三越本店を利用する顧客のニーズを満たしていく役割を担っていると認識しています。また、誰

写真2 日本橋三越本店外商担当者向け勉強会



神奈川歯科大学提供

もが知る老舗百貨店とコラボレーションすることで、先進性や信頼性を印象付けることにも期待しています。日本橋三越本店での開院は運命的で、いろいろな方との縁もあり、その場所に導かれたと思っています。

### 医科歯科連携の難しさ 受動から能動へ

——クリニックではどのような医療が行われるのでしょうか？

鹿島 医科歯科連携を基本とした、西洋医学と東洋医学を融合したオーダーメイドの医療を提供します。認知症診療は診断技術（MRI・SPECT-CT・PET-CTによる脳画像検査、脊髄液検査、遺伝子学など）の進展により、早期診断が可能になりました。検査診断は当院と連携している、総合東京病院・湘南鎌倉病院・横浜新都市脳神経外科病院・インディバークリニックで実施します。検査機器も院内に備えていることが望ましかったのですが、日本橋三越本店は国指定重要文化財です。巨大な検査機器を設置するには建物に対する物理的な破壊が必要になり、壊して搬入することはできません。先進医療機器を備える医療機関と連携することで診断の部分は解決しました。患者さんにはご足労をお願いすることになりますが、医療連携の幅も広がりましたので、結果論ですがよかったですと思っています。

西洋医学には認知症診断や診療の

他に、口腔内診療も含まれます。先ほど歯周病と全身疾患の関わりについてお話しましたが、認知機能と歯周病も密接に関係していることが明らかになっています。歯周病、インプラント、根管治療、かみ合わせや再生医療など、各科の専門医チームによる医科歯科連携の認知症治療を実践します（写真3）。

東洋医学については、エビデンスがしっかりしている鍼灸を行います。『三焦鍼法』という鍼灸の施術がありますが、脳内を含めた体内の老廃物を外に洗い流す効果があるとされています。『三焦鍼法』はわが国では150人程度が使うことを認められている施術で、認知症の予防や改善に効果があるのではないかと考えられています。鍼刺激や鍼治療が脳機能に影響を及ぼすことは間違いなく、それにより大脳皮質や海馬の血流量が増加することは、認知症治療の可能性を否定するものではありません。

——医科歯科連携の成功例はあまりないように思います。どのように連携されるのでしょうか？

鹿島 本学では「もの忘れ外来」で医科歯科連携を実践してきましたが、当然のようにスムーズにはいきませんでした。まさにトライ＆エラーの繰り返しです。医科歯科連携の最大の課題は、医師・歯科医師のいずれも受動的だということです。それぞれが医科歯科連携をとっても重要だと認識しているけれど、常に受け

身なのです。受動的な対応から自ら進んで取り組む、能動的思考への転換が必要ですし、お互いをリスペクトすることも重要です。ほかにも、メンバーにアカデミアが入るとうまくいかないで、職人かたぎのプロフェッショナルが求められます。

当クリニックでは、こういった「もの忘れ外来」での課題を教訓に医科歯科連携を実現させています。お互いにリスペクトし合いながら情報共有し、その結果、患者さん一人一人に合ったオーダーメイド医療が提供できるのです。

——今後の認知症医療においては、医科歯科連携は重視されると思われますか？

鹿島 歯科疾患が認知症に関連すると明らかになったことから、医科歯科連携の重要性は増しています。そのことをお互いに分かってはいるけれども、医科歯科連携は本当に難しい。われわれの活動が認知症診療における医科歯科連携の方向性を示せたらいいなと思っています。

### 健康的な老化 健康な脳を保ち続ける「健脳」

——「健脳」について伺います。認知症の予防や治療もそうですが、認知症患者への対応も考えているのでしょうか？

鹿島 認知症も他疾患と同様に、早期発見・早期治療が非常に重要となりますが、認知機能が低下している人との共生も重要な視点です。健脳

### 写真3 同院に勤務予定の医師・歯科医師と関係者



左から  
高木真弥氏（神奈川歯科大学鍼灸臨床センターセンター長・同大特任教授）  
菊地和泉氏（同大歯学部特任教授）  
小牧基浩氏（同大歯学部歯科保存学講座歯周病学分野主任教授）  
河奈裕正氏（同大歯学部歯科インプラント学講座顎・口腔インプラント学分野主任教授）  
児玉利朗氏（同大附属横浜研修センター・横浜クリニック院長、同大臨床科系歯科インプラント学講座高度先進インプラント・歯周病学分野教授）  
鹿島 勇氏（同大理事長）  
大竹祥雄氏（技工士兼、歯科・健脳クリニック日本橋事務長）  
眞鍋雄太氏（同大歯学部臨床科学系医科学講座認知症・高齢者総合内科教授）  
木本克彦氏（同大歯学部歯科補綴学講座クラウンブリッジ補綴学分野主任教授）

とはその名が示す通り、健康な脳を保ち続けていくという意味です。それは認知症になっても同様です。65歳以上の高齢者の増加が認知症患者を押し上げているのだとしたら、認知症治療が健康的な老化を目指す取り組みになってもいいのではないのでしょうか。

健脳にはこだわりました。当初は認可が下りなかったのですが、“健脳”はどうしてもクリニックの名称に加えたく、考え抜いた理由書を提出し、その結果、認められました。そのため開院の時期が遅れることになりましたが、今ではいい思い出です。

——ビッグデータの収集と活用も視

野に入れていと伺いました。

**鹿島** わが国の弱点として、データを集めることはできるが、分析して活用することは得意でないことが挙げられます。当クリニックでは認知症に関するさまざまなデータが蓄積され、ビッグデータを得られると思っています。そのビッグデータを活用し、オーダーメイド医療に生かします。

——認知症診療も日々進化していますが、今後期待することは？

**鹿島** つい最近、新薬が登場したように、認知症診療は常に進歩しています。認知症診断もそのうち、唾液や血液から早期診断が可能になるで

しょう。その根拠の1つに、血中タンパク質の一種である Apoptosis Inhibitor of Macrophage. (AIM) があります。AIMは体内に発生するゴミに反応して付着する性質があり、この機能を利用すれば簡便な認知症診断システムが可能になると考えています。アルツハイマー病は、アミロイドβの脳内への異常蓄積が引き金となって発症しますが、AIMはこのアミロイドβもゴミとして検知するのではないかとの仮説があります。これが実現すれば、大規模な診断機器が必要なくなりますし、何より簡便に超早期からの診断が可能になると思います。

あとは、医師と歯科医師のマインドが変わっていくことに期待したいです。本学の附属病院では、さながら美術館のように美術品を置けていますが、これは患者さんよりも医療従事者に見てもらいたいという考えもあり飾っています。医療も感性が必要とされる場面があり、臨機応変な対応が求められます。デザイン的な発想や思考を持っていただけたら、ユーザー視点で患者側のニーズに沿った思考が養われるはずですよ。

当クリニックについてもこれで終わりというわけではなく、コンソーシアム構想や海外展開も視野に入れた展開を考えています。何事も強く信じればかなうものです。これからも信念を持ち続け、チャレンジしていきます。

——ありがとうございます。